



やかただより

広川町
全戸配布

第104号
令和元年6月

災害を伝承するために

近年、大きな災害が毎年起っています。こうした災害は何年、何十年に一度というように繰り返されてもいます。しかし、その間隔はかなり長いために、前回の様子はなかなか伝わっていないということも事実です。最近、今起った大災害をどう伝承していくかということも課題です。

「稲むらの火の館」は、安政元年(1854)の南海地震の際の濱口梧陵翁の行動を教訓としてこの災害を伝承するための施設と言えます。特に津波災害は100年という長い周期でもありますので、伝える難しさもあります。東日本大震災は千年に一度の津波災害と言われたものです。

東北地方では東日本大震災を適確に伝承するための施設づくりに取り組まれています。最近も岩手県や宮城県から、参考にするためということで、調査に来られています。災害状況を記録した古文書や災害記録の石碑の調査をされる大学の研究者の先生方からの連絡もいただいています。

一方、本町や当館では災害を伝承する活動を子どもたちに担っていただくという試みも始まっています。5月5日のこどもの日には、昨年度の「ごりょう語り部ジュニア」に参加した子どもたちが、大阪の毎日放送のスタジオに招かれてラジオ出演をしました。アナウンサーからの質問にきっちり答えて、うれしく思いました。関西大学と龍谷大学の学生さんたちも今年度の「こども梧陵ガイド」の打ち合わせに来ていただきました。館長も、先に仙台でのシンポジウムで、この本町の子ども達の取り組みを紹介したところ、たいへん感心していただきました。



この大災害を後世に伝承していく活動は改めて重要なことだと考えています。

日本遺産案内書籍ができました

広川町の日本遺産「百世の安堵～津波と復興の



記憶が生きる広川の防災遺産～」案内のストーリーブックには、26の構成文化財の

説明が書かれています。

「漫画でわかる・写真で感じる」ガイドブック

は、漫画や写真で子どもたちにも理解し易いように著されています。館内で無償で



配布しています。御来館の際にはぜひお持ち帰りください。広川町の日本遺産は、全日本遺産の中でも、防災遺産としては唯一のものです。これらの案内書を読んで地元の日本遺産の理解を深めていただきたいと思います。

古文書や昔の写真を探しています

先日、神戸大学の先生にお会いする機会がありました。この先生は古文書(昔の事を書いたメモや手紙なども含みます。)を解読して、昔の様子を探り、現在に生かすということのようです。これまで和歌山では紀南地方を調査されているようで、次は広川町も調査したいと言われていました。皆様のお手元にこうした古文書があればご提供いただきたいと思います。きっちりした本のようになくても大丈夫です。昔は紙も非常に貴重なものでした。今の感覚でいえば、小さな紙切れに書いているようなものもあります。

写真は貴重で珍しいので人物を写している事が多いですが、稲むら(ススキ)等の風景写真であれば特にうれしいです。

『安政聞録』 翻訳文 (その4)

原作・古田 詠処 養源寺蔵

(仮に)今回の変の前に、人々に津波があがるぞあがるぞと言いふらせたとしても、果たして前表にてあの大きな災害を見れば、きっと天の仕業であるといえる。君主は機を大切にすべきであり、災いとその身に免れた事があれば、この世の人はこれを明らかにすべきである。特に前の人々の失敗を見て、後世の人は互いにこれを戒めとせよ。人は何と言おうとも私は私であると覚悟を決め、人を頼りにせず、なんでも我慢するを肝心とすべきである。このような時になって衣類家財のために父母より頂いた大切な身体を損なうのは実に不幸なことではないか。おろかな事ではないか。このような急変では、格別な思慮をせず、ただ逃げるのが妙案であると心得ておくべきである。どんなに大切な物があるといっても、自分が死んでしまえばどうする事ができるか。手柄を立てようと却って死んでしまった者も多くあり、逃げすぎて死んだ者はおらず、また逃げ遅れ、屋根や木に登り、幸いにも助かった人はいても、これは危険な賭けであり、全くやむを得ざる時にすべきことであり、後世の人は必ずやこれを模範としてはいけない。何某という者は逃げ遅れて波にのまれて危なかったが、藁屋根が流れてきたものに取り付いて我が家の表へ流れ寄せ、ここには樹齢二百年の内柱の大樹があり、太さはひとかかえあり、津波の後に枯れて伐ったものであるが、その木に飛び移って休息し、流されてきた遺物であり、枝に流れ着いた衣服をしばりつけた。そうして暫く波が引いた間に飛び降りて命からがら、段の方へ上ってきた。しかし大いにして何もしゃべることもできずにいた。すると濱口大人が人に迎えにいかせて焚き火にあたり、ようやく元に戻ったという事である。このような例は多いがそれを略す。濱口大人ご兄弟の事を先に記したので参考としてほしい。

五 回

濱口大人が八幡へ逃げ入ってから、休みもせずまずは難を逃れた人たちの無事を喜び、直ぐに男達を連れて逃げ遅れた人が流されてくる事を考

え、段のあたりまで確認に戻ったところ、その近辺まで逃げてきたが戻り波のため苦しんでいた者を救助すること、数人の名前が聞こえてきたので、鳥居あたりでたき火に当らせ、ようやく元気になり助かった者は感涙し、喜ぶこと限りなかった。さて逃れてきた人は、殿村・中村・井関・中埜など、縁のある所へ行き、また●道のほうへ行って宿を頼み、食を求め、また法蔵寺の且中は我さきにとここへ至り、たちまち人々が堂に満ちて、その人数は数える事もできないほど多い。いつもは荒くれ者で、これまで念仏など唱えた事もないような者も、手を合わせて心より念仏を唱えていた。また、明王院へ頼っていく人も多かった。隣村で身を寄せる所がない人々は、あるいは八幡の境内の絵馬堂、あるいは拝殿・あるいは観音堂の四寸へ行き、これらに入りきらない人は、雲の下、地の上で、草を布団の代わりとして、ある者は大樹の元などに縮こまっており、おりしも何度も大小の地震に驚かされ、堂や家にいる人は、出たり這いつくばったりする有様で、さながらすすを掃くかのようなようであった。または畑へむしろをしていた者もあり、中には用心深い人が、もし、ここまで津波が来たらどうしようと思えば思うほど心配で気もそぞろ、足が震えて我が身が揺れることまで地震ではないかと疑い、心配でしかたなく、思い思いの山の頂上まで登って避難する者もいた。後々になって思えば滑稽な事であった。また中には夫婦・兄弟散り散りに逃げ去り、その行方もわからず大声を発しながら名前を呼び合う様子は、大変哀れであった。偶然にも再会できた人は、まことに生き返った心地がして互いに涙に濡れながら抱き合う者もいた。(つづく)

<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター

〒643-0071 住所 和歌山県有田郡広川町広 671

<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>

*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)

*休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)

(世界津波の日の11月5日は開館)

年末年始(12/29～1/4)

*記念館だけの入場は無料です

